－不登校傾向児童生徒への IT による効果的支援－

長野市立芋井中学校　　教諭　　湯本　秀二

キーワード：適応指導教室、適応指導員、不登校傾向児童生徒、支援体制、ＩＴの関わり

１．テーマのねらい

適応指導教室（不登校気味の児童生徒が通う中間的な教室：学校に近隣する）に通室する児童生徒だけでなく、日々対応している適応指導員やメンタルフレンド（大学生）やボランティア等が、各種ツールの特性を生かし、直接的コミュニケーションと複合また補完的にＩＴ（ＩＣＴ）を活用する時の有効性について、実践を通して検証を行う。

２．利用するアプリケーション

商用ＡＳＰサービス「Ｗｅｂで宿題」を利用する。不登校傾向児童生徒のコミュニケーションツールとしての使い方を中心に活用方法を探る。このツールを補完の意味からも長野市立の各小中学校が利用している各種ツールも、併せて適応指導教室に提供する。

①「Ｗｅｂで宿題」の機能

・担任通信欄（ＷＥＢメール）、会議室（掲示板）、Web で宿題（e-ラーニング）、学級新聞、予定表

②その他のツール

・学習ポータルサイト（動画教材、ｅラーニング教材等）、テレビ会議システム

３．研究内容

3.1　Ｔ．Ｐ．Ｏ．

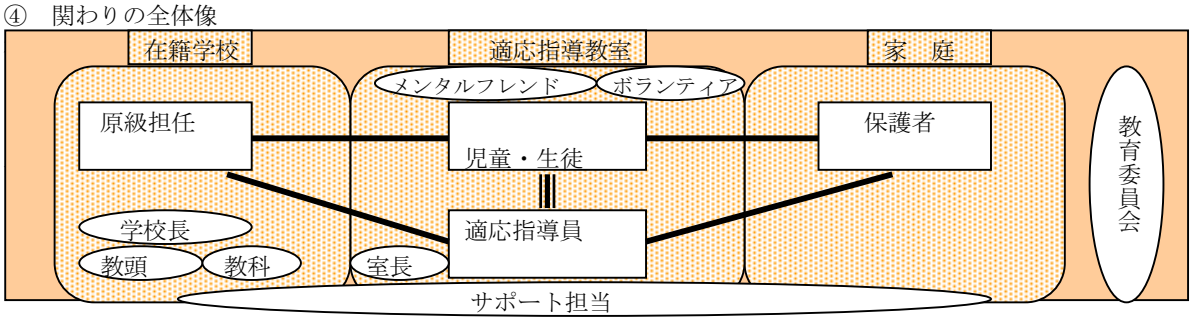
①　主たる対象者　　通室する不登校傾向児童・生徒、適応指導員

②　主たる実践場所　適応指導教室（５カ所）

③　主な関わり

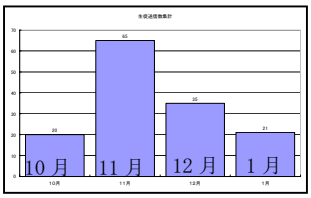
「Ｗｅｂで宿題」は多くの機能を持つが、本研究においてはコミュニケーションツールとしての面を中心に適応指導員と不登校傾向児童生徒との関わり方を重視し、仮説を組み検証したいと考えた。

④　関わりの全体像

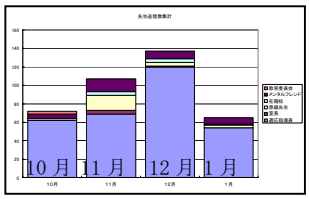


3.2　システムの利用状況（H15.10 月～H16.1 月）

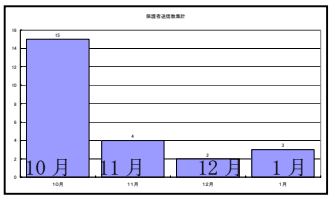
＜担任通信欄＞（生徒発信）　利用総数１４１回



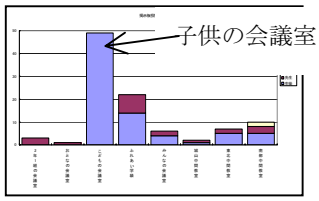
（先生発信）　利用総数７０１回



（保護者発信）　利用数２４回



＜会議室＞（会議室別）　利用数１００回



４．実践例

本研究は、はじめは適応指導教室への通室生が研究の対象であった。しかし、コミュニケーションツールを使う通室生のプライバシーを十分に保護する必要性があり、ＩＴの活用において通室生やその保護者等のニーズを把握した適応指導員による判断が重要であることが分かってきた。これらが研究の考え方を方向付けた。

4.1　Ａ教室の事例

①　背景

適応指導員１名に対して児童生徒数が多く個々への対応が大変な状況にあった。また、昨年度からインターネット接続はあったものの、コミュニケーションツールとしてのＩＴ環境はなく今年度初めて「web で宿題」が導入された。

② 適応指導員の願い

子供たちに多くの人々との関わりを持たせ、その関わりの中から子供たち自ら意欲を持ち、自立する力すなわち「生きる力」を育てたいと願っている。

③ 通室生と適応指導員の関わりの中で

「Web で宿題」の会議室へ、他の適応指導教室の生徒から書き込みがなされたことがきっかけとなり、卓球交流が企画されるに至った。当初会議室での書き込みにより交流の打合せを行っていたが、詳細な打合せに移行する必要性が生じてきた。そこで、適応指導員のメールアドレスを指導員が見ているところで使わせ、生徒同士が打合せを行わせ、卓球交流が実現した。この卓球交流の打ち合わせと運営を生徒たちが主体的に実施し始めた。適応指導員は、子供に任せてその交流を暖かく見守ることとした。この交流を通じて、他の適応指導教室や同じ適応指導教室内の仲間としての認識など、人間関係を意識させることができた。

そして、その生徒から「ホームページを作りたい」という積極的な発言を引き出すことができた。その生徒は、普段は自己表現したくないと思っていると考えられるが、今回の交流をきっかけに適応指導教室に芽生えてきた開放的な雰囲気を背景に、通室生同士が「あなたは自分のことをどう思いますか？」「Ｅさん（友達）をどう思いますか？」と自己に問いかけるインタービューをすることができた。また、それぞれが自分の得意分野を生かす中で、自然発生的に、インタービュー係、ホームページを作成する係、まとめる係等と役割分担が決まっていった。この活動を通して、本教室内で生徒同士が他を受け止められる「和」を通じて「輪」が生まれてきた。

その後、冬休みとなり、この教室に通室しない期間後一時沈滞気味となったが、生徒たちの情報発信の意欲は続いていた。生徒からアルバムを作りたい等の発案があり、文集を作成することとなった。この文集作りを通じてＹ生に変化が現れてきた。Ｙ生は当初対人恐怖的なところがあり、パソコンは苦手という意識から自らは絶対にパソコンにふれようとしなかった。当サポートチームによる講習会に参加できるようになり、Ｙ生は適応指導員やサポーターからの「うまくなったね。」などと声をかけられるようになった。キーボード入力に興味を示し、「もっと練習したい。」と言い出すようになった。中学３年にとって卒業は節目であり、自らできるようになろうとすることで本人の今後の支えとなることを適応指導員は期待している。

4.2 その他の事例

① 原級担任（通室生が本来所属する学級の担任）とのコミュニケーション

通室生には原級に対する帰属意識が残っており、原級担任のメールアドレスから来た同級生のメッセージをきっかけに、原級への一部復帰することができた生徒がいる。またその原級復帰の動きの影響で、同じ適応指導教室内の通室児・生に、「原級との関わりを持ちたい。」との好影響を及ぼすようになった。

② E-ラーニングの利用

本研究においては、通室児・生からの必要感に基づき、ｅラーニングを実施してきた。その間合いについても、適応指導員の判断を重視した。ある通室児は、適応指導教室で宿題を出してもらえたことに加え適応指導員からのメッセージを貰えたことを喜んでいた。また、ある通室生は、適応指導教室へ来ない日の宿題を適応指導員に出してくれるように求めた。これらの子供の必要感に応じてｅラーニングを実施してきている。この活動を通じて適応指導室の他の子供たちにも好影響を与えるきっかけとなった。

５．まとめ

適応指導教室は、多くの不登校児・生にとって、もっとも困難であろうコミュニケーション能力の向上などの「生きる力」を育てる場であり、教科学習についても保証できる場でもある。適応指導教室に来る児童生徒は、不登校を経験している場合が多く、適応指導員はその彼らが何を欲しているのかまた欲していないのかを把握し、心を開くまで「あるがままの自分を受け止めよう」と支援している。この適応指導教室においてのＩＴの利用は、ＩＣＴ（コミュニケーション）として利用する面だけでなく、教科指導の支援機器でもあるべきである。

実践事例で示したように適応指導教室で、適応指導員が毎日子供を支援する中で子供たちの変化をうまく捉え、つける力や願いに基づいて、子供たちが欲しているものを引き出そうとしている。その一環にＩＴ利用があると考える。通室児・生の学習要求や情報発信意欲をより受け止められるＩＴ環境が基本であると考える。

その考え方により、「Web で宿題」がＡＳＰ機能を持ち、パソコンにインターネット接続されていれば、手軽に利用できる仕組みであったことを考慮し、適応指導教室における支援機器として利用することとした。そして前述のように子供たちの情報発信等に有効であったことが示された。

しかし時間的な制約があり、本研究で「Web で宿題」及びテレビ電話などは、短期間の利用（１０月から２月）であって、十分な活用経験や成果にまで至らなかった面もある。

本研究を通じて、ＩＴが介在することで、適応指導員が通室児・生を支援する方向へのきっかけなどを誘うことができ、子供たち同士がお互いに励ましたり自身を認めたりすることができる土壌をつくることができることが分かってきた。適応指導教室の中に「和」を育むために大きく機能したと考える。

また、通室児・生や適応指導員と原級先生と疎遠になりがちな関係を、ＩＣＴでそれをつなぐことができそうであることが分かってきた。人対人の直接的なコミュニケーションだけでなく、間接的なコミュニケーションをサポートするツール利用が有効であることが分かってきた。

適応指導教室という特性ある場でのＩＴの活用は、その特性から慎重を期さなければならないが、その利用にあたっては、まずその適応指導員の願いを支える仕組みとして活用されることがもっとも望ましいと考えるに至った。